

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年  
**12月号**  
通巻568号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成29年12月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷製本  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



比良山中の次郎坊宮 屋久島 手塚賢至さん撮影(文・6頁)

昭和59(1984)年12月23日 降誕祭法話より(上)

## 自分の誕生の因縁を振り返って分かったこと

法主 矢追日聖 (満73歳)

十二月二十三日とは

どなたもおはようございます。早朝からお集まりいただきまして、ありがとうございます。

今日は、私の満七十三歳の誕生日にあたります。丁度皇太子殿下も今日が誕生日です。何の因縁なのか私には分かりませんが、とにかく明治四十四年十二月二十三日が私の生まれた日になっておりますねん。

昨日は冬の至る、冬至とせございました。太陽の当たる時間が一番短くて、古代社会においては一年の一番最後の日、大晦日おおみそ、年越しということになります。

それで翌日から段々と日が長くなっていくというので、今日から新春、お正月、新しい年が始まるんですよ。宗教的に言えば、(※少し日にちがずれているが十二月二十五日にクリスマスをお祝い)キリスト教も同じ考え方だったと思うんです。

### 私が生まれた時の家庭環境

考えてみますと、私がそういう日に誕生したということは、そこに何か面白い結び付きがあると思うんです。やはり人間は、生まれた時に一生のことが決まっておるような思いがいたします。

私はこういうような宗教的な特殊な仕事をやるようになりましたけれども、自分の足形あしがたを振り返って見ますと、私が生

まれた時の家庭環境にその原因があったと思うんです。それを今日まであまり申し上げたことはないかもしれませんが、別に私一人やなくして、皆さん方も同じことかと思うんです。

皆さん方が月参りにいつも行っているらしいゆる大倭神宮というのが、ここから一キロ余り西の方にあるのでございます。神社のことを昔は杜ちさんと言ったのですが、私の先祖代々が昔からずっと神祭りをして仕えてきた怖い杜さんだったらしい。その杜に明治三年、屋敷が開かれまして、そこが私の生まれた場所なんです。

私のでて親(父親)の母親、つまりお祖母さんは矢追家の長女として本家で生まれまして、それからだいたい年数がたつてから弟が生まれたんです。ところが弟はまだ若いから姉さんに跡取りさすことになりました。それで、大和小泉のトンモト(富本)という家から養子を迎えて矢追の家を継いだんです。お祖母さんの母親は、私からすると曾お祖母さんになるわけですが、早くから夫を亡くして、後家さんでその姉弟二人の子供を育ててきたというような家庭の事情もあつたんですね。それで今度は長男である弟が段々と成人してきたので、跡取らせるということになり姉さんは相続を譲った。だからお祖父さんとお祖母さんは、同じ矢追の屋敷の中に離れを作つて隠居することになったんです。

そこは明治二年頃の藤の木(※その辺りの地名では一番古いお宮さんでございまして、松やとかい로운古い大木が随分あつたらしいんです。ところが富雄川に橋を架けるといふことで、その木は皆お上から微発かみされるというふうなわざが流れたんですね。それで、「どうせ木い切られてしまふんやったら、新宅を作つた方がええやないか」ということになりました。その中で中心に

なつておる古い木が一本あつたらしいんですけれども、それは怖いから民家に使つてはいけないというんで、極楽寺というお寺にあげたら、その木一本だけで観音さんをお祀りするお堂が出来たそうです。

そしてあとの木を切つて、柱とか板に挽いたということも聞いております。新宅の普請は明治三年に始まって、明治四年に出来上がりました。そこで私のお祖母さんとお祖父さんの二人が隠居しようとしたんです。

ところが、なかなかそこで住まい出来なかった。晩に寝てますと枕元に白い姿の人がポーッと立って、枕をポーンと蹴られて飛んでしまったとか、私はお祖母さんからよう聞きました。屋敷を開く時には、奈良県下の祈禱師を皆集めて地鎮祭とかお祓いをしてらしいけれどもね、駄目だった。だから本家の方で住まいして、そこで子供が二人でいました。

それから十年間程は住まい出来なくて、新宅で初めて生まれたのが私のでて親なんです。それが明治十六年、新暦で言うところと明治十七年一月三日です。そして結局、てて親が(※次男だったけれども)分家の方の相続人になったんです。そういうような不思議な因縁のある屋敷で、二代目の後継ぎのような形で私が生まれてきたのが、屋敷が出来てから丁度四十年たった年なんです。

私のお祖母さんと嫁に來た母親の二人とも靈能者というか神がかりなんで、神さんと手をつないでおつていろんな話し合いました。それで「どうだこうだ」といふようなことを言う。

反対に、私のお祖父さんとしてて親は科学的な考え方、神さんとはずつと背中合わせ。てて親は、「そんなもの迷信や。そんなこと言う者は氣違ひ

や。うちは氣違ひが二人寄つた」と言うて笑つていました。

その中で私が生まれてきました。

### 経験を通じて神さんを知る

それはもう神秘的ないろいろな事件がありましたけど、一番ややこしくなつたのが大正七年からでした。てて親が「こんな恐ろしい屋敷やったら神さんに返したらええ」と言うてね、七人の家族で揃つて大阪の玉造に逃げて行つたんです。大正八年の十二月だったと思うんですが、私はまだ八つか九つくらいです。

ところがその年に流行性感冒が世間に流行りまして、母親と叔母さんと弟と妹二人がずらつと枕並べて寝てしもうた。かからなかつたのは私とてて親だけです。それで弟と妹一人が急性肺炎で死んでしもうた。本当にもう火葬場が死骸を山に積んでいて焼けなかつたそうです。

私は、上本町三丁目の叔父さんの家に預けられて、そこから空堀を通つて玉造の中本第二小学校に通わしてもらつたんやけれども、その行く道中がもうほとんど見えなくなつて霞の中歩いていふようになってしまつたんです。病院の眼科へも毎日通つてんけれども、行けば行くほど段々と目が悪なつてくる。そのうち私の母親が両足立たなくなつて、座敷の中を四つんばいで這うとつたんです。ほんで母親が神さんに伺つたところが、「大阪に逃げて行つたから罰当たつた。大和に帰つたら治る」といふことでした。

私のでてて親は商売好きやつたから、畑売つたりなんかして金貯めて商売しよう言うて大阪へ來たんやけれども、(※家族の病氣の方がよくなって商売を始めたところ)その年はまた世の中が非常

に不景気でもありましてね、結局金をみんな使ってしまった。

「てて親もとうとう兜を脱いで、二月中旬に家内の足を立ててくれたら、大和へ帰る」と、神さんと話し合ったらしい。すると三月の暮れになると、本当に母親の足がびよんと立つようになった。おかしい話でね、これも。その年の四月十五日に元の怖い屋敷に戻って来たんです。

そんなことは世間の人や村の人皆知ってはりませけれども、ただもう「大阪行って、子供二人死なして帰って来はったな」くらいのことしか分からなかったと思うんです。

私は四月から元の富雄の小学校に変わったんですが、母親がちゃんと付添って来てくれましたからな。

### 平成29年10月29～30日 第336回大倭会秋の一泊文化行事報告

#### 縁を結ぶ旅

岡山県真庭市 湯浅芳郎

文化行事は、毎年大勢の方の有形無形の支えがあって続いている。今年も色々なことがあった。

正月から訪問先を探す。今年は広島へ。広島に行きたい。ヒロシマへ行かねばならぬ。行く先を決めたら、ことは不思議な進行をする。

先ず、広島に近い瀬戸内海の大崎上島の中本好子さんが広島南部の江波気象館についての新聞記事を送ってくれた。続いて岡山市在住の矢部顕氏より連絡があり、「シュモーターハウス」の紹介に今年の朝日新聞1月8日一面トップの記事「被爆者支援の米学者 フロイド・シュモーター氏」を送っていただく。それは皇室と戦後の復興や平和運動に

私の見えなかった目は、「神さんにお供えした初水で洗うたら治る」と言われたから、毎日その通りにしたら、不思議にまたじーっと治ってきた。それが今度は近目（二近眼）になりましたね。これは眼鏡かけりや補うことできますから結構だったんだけれども。

私は子供の時分からお祖母さんが、「うちのこの屋敷は怖いところやで」とか「神さんがどうこうする」とかいろいろな話をするのを随分聞きました。お祖母さんに仕込まれている内に、私の一つの潜在意識になったのを知りませんが、自分自身でもいろんな経験をしてもらいましたし、年が流れて十五か十六歳頃には、そういうことが自然に、今度は実感として分かってくるようになってきたんです。

## 平和を祈る場所、広島へ

携わった米国人との交流についての二面にわたる記事であった。そして広島平和記念館ボランティアガイドの多賀俊介を紹介される。矢部さんの話では多賀さんは原爆被災建物の保存の活動にもかかわっている。彼の登場するNHKドキュメンタリー『どうする被爆建物』も送っていただいた。そして旅行の始まる前より歴史を伝えることの大切さ、大変さを実感した。

関西よりの参加者一行と広島駅で集合。多賀さんと駅にて初対面。先ず平和記念公園へ。多賀さんの説明を聞きながら平和記念資料館東館、原爆死者慰霊碑、原爆ドーム、原爆供養塔を回る。「過ちは二度とくりかえしません」。世界の危うい現在の世界情勢の中で、公園は外国の若い方が多い。

そしてバスで市南部の平和記念資料館付属展示

そのような私自身が持つております過去から、「神さんと人間は、お互い前向きに仲よろしきやいけない」というようなことを教えられたわけなんです。

私の生い立ちの流れの中から、結論として私が本当に分かったことは、「人間はただ人間だけで生きておるんじゃない。その片方に神さんがおるんや。両方がいわば二人連れで生活しなきゃいけない。そうして我々みんなが生かされているんや」ということです。

これが分かってくれば私も先は短いと思っております。この世の仕事が済めば、お迎えが来るのはもう決まっているんやけどね。七十三歳の今になって、皆さん方に自信を持って言えるようになってきたんです。(続く) 文責・編集部

施設「シュモーターハウス」へ移動する。シュモーター氏の建設した家の内ただ一つ残った住宅が、被爆後の広島に寄せられた海外からの支援を伝える展示施設になっている。岸野さんは平成25年8月号『おおやまと』紙を持参してくれた。「特集あなたの心に残る戦争の影」の矢部氏の「ヒロシマの家」訪問記。シュモーター氏のことば「平和運動は言うことではない。行うことである」は重い。

近くに江波気象館がある。今回は訪問できなかったが大変な記録が残されている。『空白の天気図』柳田邦男著。原爆によって通信も組織も壊滅した状況下、自らも放射線障害に苦しみながら、観測と調査を続けた広島気象台員の戦いを描くノンフィクション。原爆投下の8月6日の惨状を描く序章だけでも71ページという綿密な大作。取材の執念がうかがわれる。ヒロシマから帰り精読

爆心地と原爆ドームについて▶  
多賀さんのお話を聞く

※写真類は湯浅芳郎・見田暎子・  
李章根さんの提供

▼シュモアハウスにて



うな気がする。  
後日、多賀さんより便りがあり「シュモアハウスでお別れした時、皆さんがいつまでも手を振って下さった姿を思い出します。いつか奈良へと思っております」とのこと。今回、特に縁が縁を結ぶ不思議な文化行事でした。その文化行事の報告は筆紙に尽くし難いところがある。

したが読了まで1か月以上かかった。作者の各被災者、家族などへの気の遠くなるような詳細な聞き書きと記録の調査から成り立つ。9月17日、壊れかかった家やバラックに住む原爆被害者を暴風と激しい灌のような雨による洪水が襲う。通信の途絶した広島を直撃した枕崎台風である。  
宮島のホテル、夜の宴会、最後の踊りは全員で盛り上がったが、見えない人も共に踊る。今思えば鎮魂の踊り。それはどんな人かは『空白の天気図』の第4章、「宮島の大野村」に書いてあるよ

広島に出發する前夜、朝日新聞夕刊の「惜別」欄に、佐伯敏子さん(97歳)の訃報が載った。  
彼女は入市被爆者で、長年にわたって原爆供養塔の清掃に日参され、「命あるかぎり、ものいわぬ死者に代わって被爆の実相を語り続けたい」「事実のみを語り伝えることがヒロシマの風化を防ぐ」と語り部を続け、又供養塔の遺骨を遺族に返す搜索をコツコツ続けて、公の機関が取り組むまでつなげた人だ。



「ヒロシマ」三句  
身にしむやガラス隔ててオバマの鶴  
月天心屈ぎたる瀬戸に牡蠣筏  
橋と橋島が繋いで瀬戸の秋  
尾道しまなみ海道  
あじさい色 見田 暎子

原爆供養塔

(注1) フロイド・シュモア氏  
1895-2001年。アメリカのカンザス州にてクエーカー信者の家に生まれ、良心的兵役拒否を貫く。1948年広島島の復興住宅の建設のため全米で資金を集め初来日、仲間と被爆者のための21戸の住宅を建設。のち長崎、大韓民国、中東などにも活動を広げた。  
(注2) 『空白の天気図』 柳田邦男 文春文庫  
副題「核と災害」 1945・8・6/9・17

広島平和記念公園内にある原爆供養塔は、直径16メートル、高さ3・5メートルの盛り土の上に石造りの相輪の塔が立つ。米軍が投下した原爆により死亡した身元不明の七万七千体と、名前は分らないが引き取り手が見つからない八一七体の遺骨が、地下にある納骨堂で、今も眠る。このあたりは爆心地に近く、被爆時、多くの身元不明の死体が焼かれたところ。一九五五年、現在の形に建て直され、市内に散らばっていた身元不明の遺骨も、ここに集められた。

爆死した韓国朝鮮人二万余柱の慰霊碑です。  
一九四五年、在日朝鮮人は日本に二百二十万人。一九四四年の広島県在住朝鮮人は八万一千八百六十三人、そのうち強制徴用をうけた者は五九四四人(内務省警保局調べ)。プロ野球解説者として著名な張本勲さん(在日二世)も広島県生まれで、五歳で原爆にあい、最愛の姉を亡くしています。  
当初この碑は、在日本大韓民国居留民団広島本部を中心とする建立委員会によって、平和記念公

韓国人原爆犠牲者慰霊碑

あじさい色 李 章根

晴天の昼すぎ、供養塔の前の祭壇の上に、法王さんの水、酒、塩、米をお供えし、出發の朝に拝殿の前で見つけた、おがたま(招霊)の実の一房を添えて。聖歌「くにも」とを歌い、祝詞をあげて、心より慰霊の御挨拶を申し上げた。被爆死者、被爆生者、その御縁の方々、被爆した動物や植物。土、水、石などの自然の神々にも。供養塔の正面両横に、大きなおがたまの木が茂り薄紅色の実をゆすらせて、風が吹いていく。  
心に深くしみる墓参となりました。



園内に建立することを広島市に求めましたが拒否。一九七〇年四月に公園外に立てられました。一九九〇年、日本国内外から公園内建立を願う声が多く寄せられ、広島市は公園内移設の方針を立てるが実現ならず。一九九九年七月二十一日、平和記念公園内の原爆供養塔南側に、韓国の方に向いて移設されたという経緯があります。

この慰霊碑のもので、「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」の世話人でもある多賀俊介さんは、ハンゲルで刻まれた碑文の和訳をくださいました。

碑文の最後には、「これからは、このような悲劇の種を蒔く者もこれを受ける者もないようにして、侵略の罪を犯す者も侵略の悲しみを受ける者もないようにして、遠い国と近い隣人が永遠にお互いに助け合い、親しくし、仲良く暮らすことのできるように見守ってください。(略)ここにまつた靈魂の犠牲を心から悲しみ、永遠の冥福を心をこめて祈ります。」と書かれています。



爆死した中には、朝鮮王朝最後の国王・純宗の甥にあたる李鍋もおられます。李鍋氏は八月七日未明に帰幽され八日にソウルに移送されたそうですが、残された人々の御霊は今だ祖国へ帰れず悲痛のうちにあります。いかと感じています。

おわら風の盆に触発されて  
サーみんなで踊ろう！

大阪府守口市 大倉 ひろ枝  
今年の越中八尾おわら風の盆を訪れた溝口ツヤ

子・藤林峯子・柴地暁子さんが、その哀愁漂うおわら踊りに魅せられて、「大倭旅行で私たちも踊ろう！」が事の始まりです。

当初は、手作りの編み笠とホテルの浴衣で踊るつもりでしたが、その経緯を実家の母と姉(田中一二三・湯浅晴子)について話したところ、「え？笠を作るのはムリ、ホテルの浴衣なんて。踊るなら、綺麗に」と反応すると同時に揃いの衣装を準備して当日ホテルに送付してくれました。そして炭坑節を皆で踊っては？とのアドバイス(笑い)。

急遽、私は帰省時に炭坑節と笠の被り方を習い、溝口さんはおわら踊りを習得し、拝殿・神宮の掃除後に全員でデイスカッションしながら真剣に練習(山崎波留茂さん参加)しました。

当日、初めて衣装を身に着けて踊りましたが、おわら踊りの哀愁が伝わりましたでしょうか？炭坑節は楽しく踊って頂けましたでしょうか？私は90歳の母から踊りを習い、至福の時を過ごすことができたことに感謝しています。来年も楽しく踊りたいと思っておりますので、是非ご参加をお願い致します。



宮島厳島神社は干潮でした▶

▼恋みくじ「引いてみよう」



尾道千光寺公園展望台より▶

こぼれずみ

岸野春子

湯浅芳郎さんから「多賀俊介さんに何か大倭らしいお土産を」という指令。多賀さんは広島市のノートルダム清心中高等学校の社会科教師を定年退職後、「廣島・ヒロシマ・広島をあるいて考える会」を立ち上げられた方とのこと。交流の家に、ご自由にどうぞと積まれていた『スイスの良心ピエール・セレゾール——平和への闘いの生涯——』はどうか……私も読んで感動した。第1・2次大戦下のヨーロッパで、永世中立国スイスに軍事税や徴兵制があった。内なる平和を求める心に従いこれを拒否。投獄もされたが、兵役にかわる市民奉仕活動を義務付け、良心的兵役拒否を認めさせるため闘った人物の評伝だ。敗戦後のドイツや洪水後のインドの村で再建のため労働奉仕をした、それがワークキャンプの原点だとされる。

足あと  
足あと2011年のおまじ  
ころ、からだど、天狗さん〈2〉

鹿児島県毛郡屋久島町 手塚 賢 至

2011年、私自身に罹る自己免疫不全の症状を呈する血液性の病気について、どれだけ理解してもらえるかは疑問ながらに前回、天狗さんとの関わりを含めて書かせてもらった。しかし私(人)がなぜ治ったか(治るのか)、言い尽せぬことがあったのでまず補っておきたい。ぜひ前回の9月号に引き続きお読みいただきたい。

医学の分野では先端の治療法は日々更新されていく。私の2011年の場合、そうした医療の最前線において見いだされた科学的な治療法によって致死的な状態が回避された。加えて目に見えない大きな天狗さんの存在。きわめて医科学的な側面と、検証しえない因果を確かめられない力の助けを借りて病が治ったと私は確信している。その一連を前回報告させてもらった。それでも言い足りなかったことを一つ補足する。

心の領域、祈りと感謝することの意味にかかわることである。心と体は一体で分け隔てることはできない。自明のことだ。しかし日常の中でそれを顧みることを少なくとも私は怠ってきた。病の渦中にある私の状態を視て天狗さんのことを伝えていただいた方に、感謝の大切さを教えられた。具体的に「命」そのものへ、その力をつかさどる宇宙や自然、また肉体のすべての器官、細胞にまで丁寧なごあいさつと感謝を伝えることの大切さを学んだのだ。一刻一秒も弛まず働いている身体全部への感謝、一つ一つの器官、細胞にまで語りかけ、病床にあって私が生きているために働いてくれていることへの感謝を伝えることを行った。私自身が自分の体と対話をするのだ。

そして私の症例においては、血液中のアダムT S13が別の抗体により破壊され、それに伴い血小板が減少し難治性状態に陥っていたから、アダムT S13をたくさん生成できるようにすることが必要不可欠で、そのための治療を選んでいく。

そこで薬の力をより発揮させ、私の命を助けるために家族一同で祈ることにしたのだ。子供たちが「父ちゃんが早く良くなるように皆で祈ろう」と決めたのである。時間を決めて皆で想いを送り、私に向かって快癒するように祈りをささげる。名付けて「アダムサーティーン復活作戦」。

夜の消灯時間、私はベッドに横たわり胸の上に手を合わせて家族からの祈り、想いを静かに受け止める。自分自身の意識は、体への感謝の想いを一つ一つの器官、細胞にまで伝え、ありがとうの言葉を丁寧に添えながら肉体に呼び掛ける。

ある夜のこと、ほの赤く輝く満月の光と共に天空から降り注いでくる、まるで慈雨のような、愛の光とも呼べそうなものが体の中に染み入り満たされていく。私の意識が反省と感謝を捧げながら祈りの実体を感じている。それを私はベッドで一心に受け入れている。

適切な医学の施術と本人の自然治癒力、見舞いに訪れてくれる方々の想いも含め、顕幽のいろんな力が相重なって私(人)は治っていった(治る)のだと思う。

現実界とは異なる、実証、検証しえない因果も知れぬ異界の領域、霊的な世界というものも共に存在し、リンクしあうということに気付かされた。陰と陽、陽と陰、自然と生命が持つエネルギーの

発露により現象化し、私の中で実在化したというわけだ。

2011年のこの年、退院してもなおしばらく体は元に戻らなかった。体力も気力も著しく損なわれたことが感じられた。多量の薬を用いたのだから体にも当然相応のダメージがあったのだらう。発症前の状態にはもう完全には戻り切れないと観念して一年かけ、二年かけじわりじわりと回復の時を待った。天狗さんのことは無論頭から離れずに、いつも一緒にいる感覚で常に感謝の気持ちを今も持っている。

病後、あれこれ書籍やインターネットにて「天狗」を調べるが浅学ゆえはかばかしい理解は得られない。やはり私的に得た答えを示してくれたのは『とおやまと』紙である。2007年5月号の、前号でも紹介した「太郎坊・次郎坊を求めて」に、〈霊界の法主様の御意向を受け大倭教務本庁2階に太郎坊大善神、次郎坊大善神の座が設けられ法主様の命を受けた二神の教務本庁守護が始められた〉と林修三さんが書かれ、続く10月号に〈太郎坊―太郎坊山に座す御霊神。次郎坊―比良山頂近くに座す御霊神。太郎坊―2000年、次郎坊―2002年、大倭に移り鎮座。2006年7月23日入魂式〉と杉本順一さんが書いておられ、これらは文字通り私の太郎坊、次郎坊探訪の水先案内となった。

天狗さんの世界はどうやら近江、滋賀に縁の深い事があるらしい。近江は湖の国、水の国である。琵琶湖は湖東の伊吹、鈴鹿山系の山々と湖西を南北に貫く比叡、比良山系より水を集め、滋賀県はもとより京阪神一帯の水瓶として古来より水の恵みを惜しみなく与え、人々の生活と文化を支えてきた。湖をはさんで東西に太郎坊と次郎坊天狗さんを祀るお宮は鎮座するという。天狗さん探訪へ

と私のはやる気持ちは誘われていった。

古代の近江は、国津神と天津神が混淆して分厚い層を織りなしている。先住の人たちと渡来の人たちによる様々な歴史を経て中世、近世と日本史の中核に様々な歴史を刻んできた。琵琶湖の西岸、坂本の地にある日吉大社や比叡山こそまさに、「神ながらの道」と「仏の道」が醸す日本の宗教文化の源流たる歴史の渦が秘められている。

ところで『おおよまと』の読者には「奈母太加天腹」の言霊はなじみの深いことと思う。矢追日聖、法主さんは『すさのお』（1972年12月発行・第75号）において太郎坊宮にちなみ、へ太郎坊の正式名称は阿賀神社、「阿」アはタアと同じく男・陽。「賀」はカアと同じく女・陰と解釈するのが古代人の心情に適す。中世以降（山は巨石露出）密教・修験道場の色彩を強め、本来名より太郎坊宮と呼び慣らすようになった。古代人の「神奈備」が神仏習合の修験道と化し、本来の姿を見失う典型である。と明確に記されている。

なるほど実際にこの山に接してみると納得できる。山の姿は秀麗な三角形、山頂付近には雄々しい巨岩がそびえ、山腹の本殿に連なる手前の参道には大きな岩が重り、体を細めて隙間をくぐりたどり着く。まるで狭い産道を経て新しい命が生まれて出づるように。陽と陰、太と加の姿が現されている。琵琶湖を挟んだ太郎坊、次郎坊、そして比叡を一山超えた洛北には天狗界の首領たる鞍馬の天狗さん。この大天狗さんが大倭神宮の守護を司る鴉嶽大神（とびたけのおおかみ）という。名だたる天狗さんたちの濃厚な香りが漂い立つ一帯だ。

＊

実はこの「太」と「加」、大倭にちなむ二つの文字を私は子供の一人に用いている。この息子は沖繩の芸術大学を経て今も沖繩を本拠として制作

活動を続けているが、毎年夏に屋久島の、今や父母世代が高齢化している白川山という集落に里帰りして、「しらこがえりプロジェクト」というアートプロジェクトを展開して、すでに5年目だ。彼自身の出自を確かめつつ若い世代の作家たちに呼び掛け、若者達がこの自然豊かな清流こだまする山深い里で共同生活をしながら作品制作する。

この息子が私の次郎坊探索の糸口を見つけてくれた。見えざる縁の糸はどこに張り巡らされていることか、2015年の夏に驚きの出会いが出現したのだ。

9月の始め、プロジェクトに参加した息子の後輩という若い女子学生が我が家を訪れて、一緒にお茶を飲みながら問はず語りに出身地を聞いた。すると滋賀県の琵琶湖の西側、湖西の比良が出身地という。「えっ、比良ですか。それならもしかして……その辺りにある……次郎坊……という山をご存じないですか?」「ああ……次郎坊さんなら私の父が……」、スラリと次郎坊の名前がこぼれおちた。一瞬血がたぎり電撃に打たれるような驚きがあった。永く想い焦がれいつか出会いたいと念願していた次郎坊山の名が、初めて出会った若い娘さんから発せられ、しかもその次郎坊宮の祀り事に父上がかかわっておられるという! 私はいきなり次郎坊さんの懐に転がり込んだ心地がした。

比良は南比良、北比良に分かれていて樹下神社と比良天満宮が地域の産土の神社として大切にされ、この二社は同じ敷地の境内に肩を寄せあつて納まっている。この比良の地に次郎坊山があり、標高990m。次郎坊宮は次郎坊山の山懐にあつて毎年9月8日が大祭の祭礼日という。

父上は比良の地は移住してきた場所であるが、今では地域の村からの信頼を受け、次郎坊宮の参拝登山の導師をされているという。その理由を聞

いてまた驚いた。父上は長く比叡山で修行されたお坊さんであり、現在は山を下り自宅に祭壇を設け比良山の修験道を主宰され、山と湖をつなぐ水への祈り「比良八講」というお祭りも長年続けておられるという。次郎坊天狗さんと修験道、ますます比良の地を訪ねばなるまいと思いは募る。

この年の次郎坊さんのお祭りにはいかにも参加はできなかったが翌年2016年の2月、初めて比良の地を踏む。JR湖西線比良駅からみぞれ交じりの雲の中に次郎坊山が見え隠れする。こんもりとした森の気配に向けて歩き始め、古来より若狭と近江、京都を結び、歴史に名高い鯖街道の一つの国道に面して少し位置をずらして二社の鳥居が立つ。スタジイの大きな木と杉木立とが居並ぶ森を抜けるとゆかしき拜殿、本殿が並び立つ。柏手を打つと高らかに周りの木立に反響して木霊となった。5年の歳月を経てついにここまでたどり着けたのだ。

そしてこのご縁を引き寄せて私は父上に連絡を取り、9月8日の次郎坊宮祭りに許しを得て参加させてもらえる手はずとなった。やっと山中に坐する次郎坊宮に相まみえることが叶ったのである。清涼な沢水の連なる谷治いの道を、先祖代々引き継がれる宮衆と呼ばれる村の人たちと共に登り、険しい岩場の傍らに立つ小さな祠に着いた。そしてその小祠に寄り添うような傍らを見て、内心あつと声を上げた。そこにはあまりにも慎ましい小さな石が土の上に斜めに顔を出していたのだ。あまりの石の慎ましさと愛らしさに心が震える。この小さきものに宿るカミに私は深く共振り手を合わせ、「奈母太加天腹」を唱えながら次郎坊さんへの感謝の気持ちを伝えたのであった。

織りなす糸の物語はさらに続くが紙幅が尽きた。御縁あらばまたいつか。

# あじさい日誌

11月11日 故中島康治さんと充世さんの長女木綿貫さんが坂本修一さんと帝國ホテル大阪で結婚式を挙げられ邑の関係者21名



が出席。康治さんの写真を抱いた教長さんが、お父さん役でバーンロードを歩かれました。  
11月15日 大倭神宮月次祭。  
中島武宣・マリ子夫妻の長男雀人君(五歳)が4人の祖父母もそろわれて七五三のお参り。  
11月23日 大倭大本宮月次祭。  
この日は昭和38年11月23日の法話をお聞きしました。平成20年11月号『おおやまと』に「神ながらの道によって人間の向上を」として掲載分。  
4時から大倭会館で大倭会役員会が開かれました。

## 新年のご挨拶を申し上げます

大倭主義  
地下水の精神(宗教)  
心身の健康(幸福)  
相互の扶助(平和)  
大倭紫陽花邑の根幹

昭和62年7月17日  
病院について奈良日日新聞取材の折りの資料  
(法主メモより)

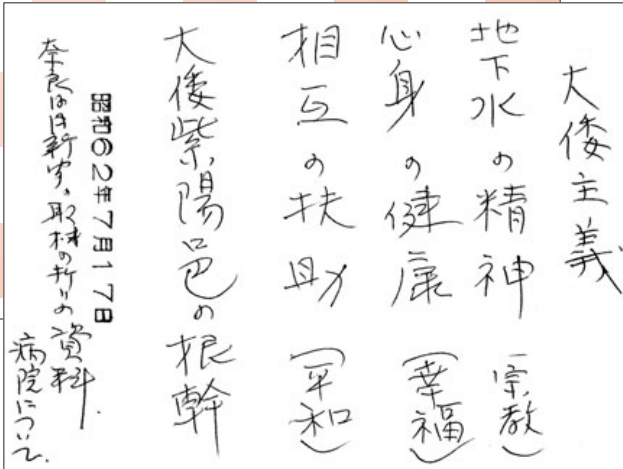
今年もよろしくお付き合いください。  
大倭七十四年 元旦

宗教法人大倭教

紫陽花邑

矢追

邑人一同



福の神様  
奈良日日新聞取材の折りの資料  
病院について

11月26日 金鶏祭の前に、大本宮奥津齋庭で金剛大龍王さんの寝床の敷き替え神事が行われました。桜井市の畑中農園の自然稲藁370束ほどを、高橋良美・見田映子さんのほか今年は山崎正知・波留茂・将晴さんと中島健さんも参加して無事きれいに仕上げられました。  
12月4日 大倭神宮で金鶏祭。寒い雨の日となりました。  
12月6日 大倭神宮月次祭。本年をもって玄徳院を閉じ邑

を離れるとのことで、高橋・見田さんがお世話下さっていた神事に関する諸事について、夜7時から教長さんはじめ邑人達が大会館に集まって話し合いました。  
その後、邑倭の会。  
12月9日 午前8時から大倭墓地の大掃除、9時から紫陽花邑の大掃除が行われました。  
午後、交流の家でFIWC定例委員会が行われました。  
大倭安宿苑では

## あんない

お祝いをしました。  
(茂毛菖園)  
11月21日 22日は「いい夫婦の日」。ピアノでうたおうで「夫婦」の歌。女性の参加者達の旦那様の話で盛り上がりました。  
(八重垣園)  
12月1日 創立27周年を行事食と紅白まんじゅうでお祝い。

\*年始祭(大倭神宮)  
1月1日(祝) 午後12時45分から法主奥津城、紫陽花邑内の諸靈へご挨拶。  
午後2時から大倭神宮にて。  
\*月次祭(大倭神宮)  
1月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。  
\*大とんど  
1月14日(日) 午前9時30分より大本宮西の齋庭にて。注連縄や門松等を火にあげる神事です。当日の天候により日時を変更する場合があります。  
針金・プラスチック等 不燃物は必ずはずしてきて下さい。  
\*大倭会主催第588回祝会  
1月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
\*月次祭(大倭神宮)  
1月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。  
\*月次祭(大倭大本宮)  
1月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

んな記念公園の「水景園」へ紅葉見物に行きました。  
11月23日(特養) 誕生会で7名(内米寿と卒寿各1名)の方の